

青年に対する心理教育的小集団の意味と課題

荻本 快* 大橋 良枝**

The meaning of psycho-educational small group for adolescence

Kai OGIMOTO* Yoshie OHASHI**

【要旨】

幼少期の親からの虐待・ネグレクトや家庭内暴力の目撃といった家族におけるトラウマを抱えている青年は、自律的かつ主体的に活動に取り組んだ時に、その活動集団を「もう一つの家族のようだ」と感じる。筆者らが、家族でのトラウマのある女子青年に対して心理教育的な小集団を実践したところ、「家族のような集団体験」が起き自己イメージが安定することを観察した。本稿では、心理教育的な小集団の実践研究における課題を整理することを目的とする。

キーワード：擬似家族集団，アイデンティティ発達，心理教育的小集団

1. はじめに

工業化社会・競争社会における家族の貧困，親からの虐待・ネグレクト，家庭内暴力の目撃といった，家族でのトラウマ・傷つきを抱えながら生きている青少年がいる。こうしたトラウマをもつ青少年は自分の居場所となる活動集団をコミュニティに渴望するのだが，そうした集団に所属することは難しく，非行集団に入ってしまうか，家庭の最深部に引きこもるなどの問題に至る事例も多い。

家族での傷つきを抱える青少年が，幸運にも良好な市民活動を経験することができた場合に，その活動集団を「もう一つの家族のようだ」と感じることもある。たとえ血のつながりや戸籍上のつながりがなくても，青少年は，その集団を家族のように体験するのである。

筆者らは，青年が親や家族をどのように体験して

いるのかに関心をもってきた。これは精神分析学において，対象関係，対象表象，転移といった概念で検討されてきたテーマである。

これまでの調査研究（荻本，2015；Ogimoto, 2015）において，中学生が認知する父親像と母親像と，アイデンティティ発達の関係を調査したところ，父親と母親の内在化の度合いが同程度だと査定される中学生は，仲間関係が安定しており，非行や暴力などの外向的問題や不安や引きこもりなどの内向的問題が抑制されることが見出された。

筆者らは，実践的研究を通じて青年が認知する両親像や家族のイメージが，小集団事態でどのように変化するかに焦点を当ててきた。2015年8月と2016年8月に，ルーテル学院大学の石川与志也氏と共に，引きこもりの問題をもつ男子青年に対する集中的集団心理療法を地域コミュニティにおいて実

* おぎもと かい 相模女子大学学芸学部子ども教育学科

** おおはし よしえ 聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科

践し、国内学会で成果を発表した(石川・荻本, 2016)。2018年8月には International Association for Group Psychotherapy and Group Processes (IAGP) の年次大会で研究発表を行った (Ishikawa & Ogimoto, 2018)。これらの実践は男性リーダー2名による小集団であり、青年が報告する親像の変化が父親に偏るといった課題が見られた。そこで筆者と共同研究者は、男女のリーダー2名による小集団事態による研究を計画した。

筆者らは、女子大学生に対する四日間の心理教育的小集団プログラムを構成した。一日目に参加者は一人で男女のリーダー達と面接をおこない、自己が認知する両親や家族について語ってもらった。二日目と三日目は全員の参加者が出席する小集団において、男女のリーダーのサポートによってメンバーは再び自己が認知する両親・家族・友人について語ると共に、リーダーや他参加者とのやりとりを通して自己を探求した。四日目は再び参加者は一人で男女のリーダー達と面接を行い、その時点で認知する両親像と家族について語ってもらうと共に、小集団を振り返ってもらった。

このようなプログラムを実施したところ、個人療法では治療者と患者の双方にとって困難な過程である「親を脱理想化する過程」が、この小集団での他参加者との関わりによってスムーズに進行することが見出されたのである。

また、家族における傷つきを抱えている女子青年がこのプログラムに参加したところ、その青年がこの小集団を「家族のように」体験し、女性リーダーとのやりとりや集団ダイナミクスの中で、見違えるように主張的になると共に自尊心が高まり、その後の学業において飛躍的に「自ら学ぶ」学生へと成長した。筆者らは「家族のように」小集団を体験する現象を「擬似家族集団」と名づけ、その構造と力学を分析した。2018年8月に行われる IAGP の年次大会で研究を発表している (Ogimoto & Ohashi, 2018)。

さらに、2018年春に実施されたプログラムでは、かなり深刻な家族のトラウマをもつ女子青年が、この小集団を「まるで家族みたい」と形容し擬似家族集団として体験しただけでなく、未分化な親イメージにかなり影響を受けていた自己イメージが分化・統合され、アイデンティティ感覚が安定する過程が見られた。家族のトラウマをもつ青年に対する育成効果が観察されたのである。筆者らは、女子だけで

なく男子も、この心理教育的な小集団を家族のように体験し、自己イメージが分化・統合し、自律性と主張性が向上するかどうか、検討する必要があると考えている。

このような青年を護り育成する「家族のような集団」、つまり擬似家族集団は、どのような構造をもち、どのような集団ダイナミクスがあり、どのような原理によって創成されるのか、本研究は臨床心理学の観点から明らかにしようとしている。

2. 研究の目的

筆者らは、親世代と青年世代の二世帯から成る心理教育的小集団プログラムを開発した。構成員は親世代である男女2名のリーダーと青年世代の5名程度のメンバーで、青年はリーダーのサポートのもと、自分の親のイメージと家族のイメージを安全に語ることをする。これを実施したところ、参加者がこの小集団を「家族のような集団」だと体験し、参加者の自律性と主張性が育まれることが傍証された。さらに、2018年春に行われた実践調査では、深刻な家族のトラウマをもつ女子青年の自己イメージが格段に安定することが観察されている。本研究では、この心理教育的小集団のいかなる要因が、家族での深い傷つきをもつ女子青年の心理学的発達に寄与したのか、臨床心理学の中でも精神分析理論に基づいて考察することを第一の目的とする。

女子青年への発達促進的な効果が示されてきた心理教育的小集団を、次は男子青年でも実施する。家族における深刻なトラウマを抱えている男子青年が参加した際にも、小集団を「家族のようだ」と体験し、自己イメージの安定化、自律性・主張性の向上が見られるかどうかを確かめる。これを第二の目的とする。

そのために本研究は、①既に得られている女子青年に対する実践結果を考察し、国内外の学会で発表・投稿する。②男子青年に小集団を実施し、実践上の留意点と、男子に対する効果と限界を明らかにしていく。

3. 研究の意義

思想家である東浩紀は2017年毎日出版文化賞を受賞した「ゲンロン0 観光客の哲学」第2部「家族の哲学」の中で、グローバリズムとナショナリズムを共に批判するための基盤として、家族で育まれる主体性に焦点を当て、大きな議論を呼んだ。日本の

古い家族の構造が日本の全体主義を促進したことや、家父長制の強い家族において女性の権利が剥奪されてきたことは無視してはならない。しかし、東の言う通り元来「家族」概念自体は中立的な用語である。家族においては、集団と個という葛藤が最初に生じるという点からも、精神分析理論を研究・実践してきた筆者らにとっては賛同できる部分が多い。他方で、「主体性を育む家族」を実現させるためには、多くの臨床心理学的な検討が必要だと思われる。本研究は、東の提唱した「家族の哲学」の発想を、実践的に補完していくことになる。

「自ら学ぶ」つまり内発的動機付けの発達に大きく寄与するのが、子どもの家族との関係であり、家族に関する認知枠組みである(荻本, 2015)。「家族のような集団体験」の成立要件と集団ダイナミクスを明らかにすることは、自律性・主体性を育む小集団を、親世代が効果的に提供することにつながるだろう。市民活動における小集団を足場として、青少年は新たなコミュニティと家族を自律的・主体的に創成していくことができるだろう。

付記：本研究は相模女子大学ヒトを対象とする研究に関する研究倫理審査委員会に承認されている。本研究は相模女子大学特定研究助成費(A)の助成を受けた。

引用

東浩紀 (2017). ゲンロン0：観光客の哲学. ゲン

ロン

石川与志也・荻本快 (2016). 男性性成熟を目的とした集団精神療法の治療的要因(1)—Yalom の治療的要因の変遷による検討—. 国際力動的心理療法学会第 22 回年次大会, 東京大学, 東京.

Ishikawa, Y. & Ogimoto, K. (2018). Differential Diagnosis of Hypersensitive Narcissism: Personality Disorder and Protracted Pubertal Response. 20th Congress of International Association for Group Psychotherapy and Group Processes, Malmo Sweden (Paper Presentation).

荻本快 (2015a). 内発的動機付けを促進する親表象—自我心理学による再構成—. 相模女子大学子ども教育学会紀要 子ども教育研究, 7, 13-19.

荻本快 (2015b). 青年期初期における両親への同一視の意味. 国際基督教大学大学院提出博士論文.

Ogimoto, K (2016). The Meaning of Identification with Parents in Early Adolescence. 21th Congress of International Association of Dynamic Psychotherapy, Kumamoto, Japan (Paper Presentation).

Ogimoto K. & Ohashi, Y. (2018). Independence in Quasi-Family Group: A Research Project with a Psycho-Educational Group for Women's University Students. 20th Congress of International Association for Group Psychotherapy and Group Processes, Malmo Sweden (Paper Presentation).